

20世紀の思想を俯瞰する—ちくま学芸文庫

筑摩書房代表取締役専務 熊沢敏之

皆さん、こんにちは。筑摩書房の熊沢と申します。どうぞよろしくお願いたします。

じつは、「20世紀の思想を俯瞰する」という、とんでもないタイトルを付けてしまった、といま後悔しているところです。司会の方から「まともなタイトルをお願いします」と言われて、中身を考える前に付けたタイトルがこれでした。だいたい編集者というのは、長年いい本をたくさん読んでいて、中身にそれほど精通しているわけではないのです。ですから、もとよりこんな大それたテーマでお話できるはずもありません。本当に楽しみで読んでいて読者の方のほうが、よほど深く読めていたりすることがよくあるものです。

でも、こんなお話をさせていただけるのは、一定の年齢になるまで編集の仕事をしておりまして、そういう経歴の余禄みたいなものだとご理解ください。

お手元に配布資料があります。これが今日お話しする、「ちくま学芸文庫」のシリーズ内シリーズ——シリーズ名はどこにも明記されていませんけれども、私自身が「20世紀クラシックス」と命名していたもの——のリストです。著者の生年順に並べてあります。刷り部数なども書いてあり、これはじつは社外秘であります。公開するのは憚られますが、話を実証的に裏づけるためと、ちょっと自慢するためにはこんなことも必要かなと考え、あえてそういたしました。

筑摩書房はどういう会社？

筑摩書房はどういう会社かということを知っていただきたいと思ひまして、まずその紹介をさせていただきます。筑摩書房は1940年、戦前の昭和15年に創業されました。創業者は古田晁（あきら）、長野県出身です。同郷である岩波書店の創業者・岩波茂雄さんに憧れて、まったくの素人から出版業を始めたと聞いています。なかなか豪放磊落な人で、私が入社したときはもう亡くなっていましたが、先輩の社員からさまざまな逸話を耳にしました。酒の飲み方がものすごく豪快で、昼間でも経理部に行って金庫を開けて一握みもっていきみたいなことをしたという「伝説」があります。経理部はどうやってその日のお金を締めたのだろう、と気になりますが……。後代の社員たちはそういう無頼漢の風潮を見習って、お酒だけはよく飲みました。

最初に出した本は、『中野重治随筆抄』、宇野浩二『文芸三昧』、それから中村光夫『フロオベルとモオパッサン』の3冊だったようです。

時を重ねて、来年で創業70周年になります。現在、90人あまりの社員でつくる中規模の出版社です。年間出版点数は350～360点、1日1冊世に送り出している計算になります。筑摩書房のものが全点ある大きな本屋さんに行くと、だいたい3000点ぐらいが展示されているはず。創業以来70年で出した本の総計は約1万7000点、1年に換算す

ると250点ぐらいということになっています。以上が、小社の基礎的なデータです。

一定の年齢以上の方は、筑摩書房というと「全集の筑摩」というイメージをもっていらっしゃると思いますが、まさしくそのように全集をたくさん作ってきた会社なんですね。一時、『現代日本文学全集』（1953年）という全99巻の文学全集がありまして、それが1巻あたり10万部以上売れて、総計1300万冊を記録したといえますから、もうお札を刷っているみたいな時代があったということです。けれども、利益がなぜか会社に残らなかったというの、また事実のようであります。

そうしているうちに、大きな躓きがありました。1978年の会社更生法申請（事実上の倒産）です。景気が最悪の現在、民事再生法申請ということをよく耳にします。これは、会社を再生する際、役員がそのまま残って事業の建て直しをするというものです。しかし、当時はそういう法律はなくて、役員は退陣して、残った人間が債務を弁済しながら新たに会社を継続するということになりました。負債総額はおおむね36億円。債権カットはなしで15年弁済という、気の遠くなるような計画でした。当時200人あまりいた社員が3分の2になり、半分になりして、その後ずっと90人ぐらいで落ち着いています。月々の給料は3割5分カットされ、ボーナスはまったく出なくなりましたので、年収は半分という生活でした。そのときある印刷所の営業マンに呼ばれて、「熊沢さん、今後どうするんですか？」と訊ねられました。「できる方ほど、先におやめになるものなんですよ」とも言われて、俺はできないからずっと今に至っているんだ、と自戒をこめて思い返しています。それがちょうど、入社1年目の出来事です。

主力の全集が売れなくなれば、出版物の構成を変更せざるをえなくなります。そこで、いわゆるペーパーバック（文庫、新書）のジャンルに乗り出していこう、ということが徐々に模索され始めました。1985年には「ちくま文庫」が、1992年にはこれからお話する「ちくま学芸文庫」が、それから1994年には「ちくま新書」が創刊されました。今では刊行点数の8割方が軟らかい表紙の小型本、つまりペーパーバックになっています。売上も、7割を超えています。じつをいうと会社更生法申請時に、千代田区神田小川町の100坪の土地に建てられた社屋が数少ない会社の財産のひとつとして残っており——ひどく古い、使い勝手が悪い社屋だったんですけれども——バブルの最盛期（1989年）だったものですから、それが法外な値段で売れて、それで91年の更生法終結にこぎつけたのです。社屋売却を決断できたことと、全集からペーパーバックへの移行に成功したことで、会社の現在があるというわけです。

筑摩書房を一言で喩えるならば、「コンビニ」型出版社ということになるでしょう。コミックと雑誌はないけれども、あとのジャンルはだいたい揃っています。文芸書、実用書、人文書、そして理工書も少しあって、文庫も新書も出しているという会社です。そのあたりが、これまでお話された人文会の参加出版社とはちょっと違うところです。人文会は、「専門店」に近いイメージですね。一方、千代田図書館の近くにある小学館や集英社、そして講談社などは代表的な総合出版社、いわゆる「百貨店」ですね。「コンビニ」と「百貨店」とは較べるべくもありませんが、必要なものは何でもある、雑貨もあれば、食料品もありますよ、というのが「コンビニ」の売りなんですね。

先ほど、雑誌を出していないと言いましたが、筑摩書房にとっては売れる雑誌をもつことが一番の課題（夢）だったのです。何度かそうした試みをしてきました。一定の年齢の方はご存じだと思いますが、『展望』という総合雑誌がありました。岩波書店の『世界』や、中央公論社の『中央公論』に近いものです。堅い雑誌ですけれども、おもしろいと評価して下さる方もたくさんいて、それを会社更生法申請時まで細々と出していました。『太陽』という雑誌もありました（平凡社の『太陽』とはまったく違います）が、5号で終わってしまいました。山下清という、「裸の大將」の絵を表紙に使った雑誌だったんです。私も倉庫でほこりを被ったバックナンバーを見たぐらいで、ほとんど世の中の人に読まれた気配がないという雑誌でした。

その後、『人間として』『終末から』という雑誌もみんな10号以内で廃刊になっています。1995年に満を持して打って出た『頓知』はまだ記憶に新しいものですが、これも結局10号までしかもちませんでした。これを全巻もっていると、かなりレア物で値段が上がるかもしれないとも言われているのかどうか……。

いずれも雑誌は成果が出ませんでした。結局、覚悟を決めて、書籍一本だけでやっていかなければならない出版社なのです。ただ、出版業界では今、雑誌がひどい状態になっています。ピーク時（1996年）の4分の3ほどしか売れていない。黒字が出る雑誌がほとんどなくなっているという状態で、雑誌を続けている版元はどれも大変そうです。ですから、むしろ雑誌をもてなかったのは運がよかったのかな、と思います。

自己紹介をします

私がどういう人間かを、次にご紹介します。ずっと地味な仕事をしてまいりました。1953年生まれですから、現在55歳です。もう30年以上この業界にいて、筑摩書房だけしか知らない人間です。ですから、あまり出版界のことを相対化することはできませんが、他の版元の人間と違う点といえば、会社の「倒産」を入社1年目で経験しているということでしょうか。

1977年4月に入社して、78年の7月に「倒産」を経験しました。1年3カ月の「命」でしたね。編集部配属されていましたが、それこそ社風なので、毎日、酒ばかり飲んで暮らしていて、そのうちに「倒産」になってしまった。忘れもしない、それはものすごく暑い日で、倉庫にある在庫を保守するために泊まり込みをしました。パレットという、本を積むスノコのようなものがありますが、それを屋外に出してその上に寝て、交替で見回りをしながら「取り付け」に備えました。じつは、債権者の方々の見識もあつてのことなのでしょうが、私がいたところには誰も来ませんでした（笑い）。

「倒産」をしたので、若くて経験もない人間はこのまま編集部においておいてもしょうがないというので、営業に行つて本を売って来い、ということになりました。ところが、売る本がないわけですよ。だから本屋さんへ行っては、喫茶店で無駄話をしていて、そんな思い出です。

暇だから、けっこう本を読んでいました。先輩にあたる団塊の世代は大学紛争の主役で、一方私はその後の世代なんですね。彼らからすると、「できない、陥没の世代」に見えたのでしょうか。そういう全共闘世代の拠つて立つところは、もちろんマルクスの思想でした。でも、ちょっと違うんじゃないかな、という気は学生時代からしていたんです。とはいえ、べつに右派でもなくて、ただ、「革命」みたいなものを求めて社会運動をすることに、どうにも違和感がありました。そこで興味をもったのが、ひとつは構造主義的な思想、文化人類学的なものを思考の原理として活用する学問ですね。もうひとつは、「革命」を帰結とするような、マルクスの社会構成体史とは反対の視点を標榜する社会史です。人々の持続的な生活、歴史を変革するというより、日々の暮らしがどうだったのかに重点を置くような本のほうに、むしろ親しみを感じていました。

営業で仕事をしてたのが3年ぐらいで、その間書店を回っていました。当時、全共闘運動をして一般企業への就職に疑問をもった人たち、あるいは好きな本の近くで仕事を見つけようと思立った人たちがたくさん書店人になっていました。「ちくま文庫」に、田口久美子さんの『書店風雲録』（2007年）という本がありますが、当時、リブロ西武に集ったすごい書店人たちの話を書いています。そういう人がたくさんいました。

横浜の、ある小さい本屋に行ったら、「読書会しているんだけど、一緒に行かない？」と誘われました。「何を讀むんですか」と聞いたら、ベンヤミンの『ボードレール』（晶文社版『ベンヤミン著作集』所収）だと言うんですね。ベンヤミンは名前だけを知っている程度で、ボードレールはもう文学史上の人物にすぎないと思っていましたから、本当におもしろいのかな、と半信半疑で参加することにしたのです。ベンヤミンという人は、その後、私が「ちくま学芸文庫」の中心的仕事に据えることになる批評家です。著作集の翻訳刊行当時でいえば、1920、30年代のドイツにおいて、マルクス主義の文脈で活躍した人だと理解されていました。先にお話した私の読書の好みからすれば、ずいぶん違った方向の思想家でした。でも、これを運命的な出会いと言わないで、何と言いましょ。「哲学者たちは世界をさまざまな仕方で解釈してきただけだった。重要なのは世界を変革することだ」。これはマルクスの有名な言葉ですが、構造主義や社会史という「解釈」の学に傾いていた私の考えを、いい意味で批判してくれることになった読書会でした。1981年のことです。

その読書会の経験がすごく生きて、その後の編集者の仕事を決定的に方向付けてくれました。

本を讀んでいて、「あとがき」に編集者への謝辞が書かれているのに気づいたことはありませんか。一般の方はそれをどう思われるのか、知らない人の名前が書いてあつていったい何なんだ、と思われるかもしれませんが、我々同業の人間は目ざとくそこばかりを気にしております。すると、同じ編集者の名前が、読む本、読む本に幾度となく出てくるんです。いやでも、どういう人なんだろうと思えますよね。私が印象に残っているふたりの編集者をご紹介します。ひとり、青土社にいた三浦雅士（1946年生まれ）という編集者です。今は評論家になっていて、一方で新書館という出版社を主宰しています。この人が『現代思想』という雑誌をずっと編集してまして、とても刺激的な内容でし

たね。ちなみに、弘前高校出身でほとんど独学だと聞きました。三浦さんが作った本には、ずいぶんお世話になりました。とりわけ、当時の構造主義の系列の思想家を組織したその力量は、ほんとうに飛びぬけているなと思いましたね。80年代からは評論家として活躍していますので、本をたくさん書いています。私にとっては、編集者としての仕事のほうにより大きなシンパシーを感じる人、読書を通しての恩人でした。

もうひとり、平凡社にいた龍沢武（1946年生まれ）という編集者です。当時は会ったこともありませんが、本のなかではずいぶん馴染みの名前になりました。とりわけ国文学や思想史に強い編集者でした。国文学者の西郷信綱氏の本や思想史家の藤田省三氏の本に、ずいぶんあこがれました。繰り返し読む本はごくまれですが、これらの本のページを何度繰ったことでしょうか。そうすると、編集者のファンになってしまうんですね。ちなみに、龍沢さんは2000年ぐらいに平凡社の役員をお辞めになって、フリーになりました。

そうこうしているうちに、1987年に「ちくまライブラリー」という四六判のシリーズの編集部に異動になりました。30代半ばのことです。異動になって、本を出す仕事がノルマになる、つまり、インプットばかりしていればいい時代の終焉ではありましたが。

そして1993年に、「ちくま学芸文庫」の編集長ということになりました。

「ちくま学芸文庫」は1992年に創刊ですから、その翌年に編集長を仰せつかったわけです。じつを言いますと、「学芸文庫」を創刊した編集長が次に「新書」を立ち上げなければいけない（「新書」は、94年に創刊）というので、1年で「学芸文庫」の仕事を手放さざるを得なくなったんですね。ですから、私が1年ぐらい編集長見習いでいて、94年ぐらいから本格的にその仕事を引き継ぐことになりました。

筑摩書房というのは「コンビニ」型出版社だ、と先ほど述べました。文芸書も人文書も出しています。だいたい、その2つの系統というのは、じつはライバル関係にあるんですよ。つまり2大派閥の一方、文芸系からは「ちくま文庫」が生まれてくる。人文系からは「学芸文庫」と「ちくま新書」が生まれてくる。そういう2つの系列があります。私はずっと人文系のほうにいました。「王様のランチ」に出ていた筑摩書房顧問・松田哲夫は、文芸系の雄ということになりますね。

「ちくま学芸文庫」で本当の仕事が始まった

次に「ちくま学芸文庫」のお話をさせていただきますが、そこで私の編集者としての本当の仕事が始まったといえます。つまり、1993、94年から2000年あたりまでの、私の40代最初の6～7年が編集者としての華でした。

文庫というと、どんなイメージをもっていますか。既刊の単行本があって、それを小さい判型に仕立て直す、というのが文庫本の基本的なイメージですね。ですから、当然、自社に良質な単行本がたくさんあれば、どんどんそれを文庫にしていけばいいわけです。安い値段で提供できますから、読者も買いやすい。反対に、自社に文庫という受け皿がないとどうなるかという、いい単行本がどんどん他社に流出してしまうということになるんですね。ですから、文庫を出している出版社は自社本を仕立て直すと同時に、他社のいい本を——きたない言い回しを用いれば——掠め取ってくる、そういう仕事なんですね。大手の文庫出版社は、みんなそうです。今でこそ文庫化の際の著作権使用のルールが確立しているんですけども、昔はそうではありませんでした。たとえば、ある文庫編集者が著者に、「先生が筑摩で出されている本を、うちの文庫にいただけませんか」と言うと、著者というのは一般に多くの人に読まれるのを望みますから、快諾してしまうことが多い。文庫化されて元の単行本の売れ行きはほとんどなくなり、一方文庫版は何十万と売れた、でも、著作権をもっている原出版社には一銭もお金が入ってこなかった、ということもありました。じつにうまいことを言って交渉してくるんですよ、「やはりたくさんの方に読まれたほうがよろしいんじゃないですか」みたいに（笑い）。ずいぶん悔しい思いをしていました。

ですから、自社の優良な書籍を防衛するためにも文庫を立ち上げないといけない、というのがずっと課題としてあったんです。でも、文庫はたくさん刷らないと、低定価が維持できない。それでは、量へのリスクがすごくあるんですよ。たくさん刷れなければ文庫は無理だ、というのが一般的な通念でした。しかし、「ちくま文庫」はたくさん刷らない文庫として発足しました。当時、創刊で大いに話題になることを見込んで、3～4万部ぐらいしか刷らなかった。新潮文庫の平均の初刷りが5万以上といわれていた時代です。現在では、各社とも、その半分あるいは3分の1の初刷りになっていますけれど。「学芸文庫」のほうは、なんと6000部が基準部数です。文庫のロットではない。文庫に

なればお客さんに喜んで買ってもらえる、でも小部数なので値段はちょっと高いですけども、そういうコンセプトでやれないかということですね。それに踏み切れたということですよ。

「学芸文庫」の現在の稼働点数は600点ほどです。年間の刊行点数は60冊。放っておくとどんどん稼働点数は増えていきますが、本屋さんの棚は増えていかないですね。書店の70センチ棚というのは、1本で50～60冊ぐらい並べられる。「学芸文庫」を全点1冊ずつ揃えると、棚は10～12段必要になります。年間60冊出して棚が増えないとなると、60冊分だけ絶版にしていかなければいけない、という計算です。ですから「学芸文庫」はすぐ絶版になります。ということで、早めにお買い上げいただくことをお勧めします（笑）。

内容構成ですが、稼働している600点のうち350点ぐらいが日本人による著作で、250点ぐらいが翻訳本です。その翻訳書の一部に、本日のテーマである「20世紀クラシックス」が入っているということになります。

私が編集長になったところは、人数もそれほど割り当ててもらえず、月5冊出すのに4人ぐらいのスタッフでやっていました。ですから、必ず1人は月2冊を担当することになります。1人で年間15冊の本を作る、というのがノルマでした。薄い文庫ならまだいいけれども、「学芸文庫」には600ページをこえるものがあるんですね。これを月に2冊割り当てられたら、結構厳しいですよ。そんな時代がありました。

でも、「企画はすべて編集長が立てること」、それで、「年間60冊のラインナップを作ること」と上から命じられまして、そういうものかなと思ってやっていきました。しかし、そんなことが長く続くはずもなく、今ではちゃんと合議制になっているようですよ。

難しい本で部数も少ないから、売り上げノルマは低い、というならまだいいですが、そううまくはいきません。「ちくま文庫」と「学芸文庫」は、だいたいノルマが一緒なんです。たとえば「学芸文庫」は1200円で初刷り6000部、「ちくま文庫」は720円で初刷り1万部だとして、定価と部数を掛け算すると生産額は変わりませんね。ですから、1冊の本が初版で出し得る利益というの、あまり変わらないということになります。1冊出して、たとえば150万円とか、200万円とかの利益を出しなさいと言われていたわけですよ。

先ほど雑誌の話をしてきましたが、雑誌というのは1冊売って幾ら利益を出すというコンセプトではありません。昔、某総合雑誌は定価が0円でも利益が出る、と言われていましたが、秘密は広告収入にあるんです。ですから、利益を出すための仕組みが全然違うんですね。本は1冊売れるとそれなりに儲かる、雑誌は広告料でざっくり儲かる。だから雑誌は広告料がなくなると、俄然儲からなくなる。書籍は、細かいお金を一生懸命寄せ集めるような仕事をしなくてはいけないわけです。

私は、「学芸文庫」の2代目編集長として仕事に就きましたが、なにしろ、自社本の優良なものは全部出し尽くされて、すっかりなくなっていました。創刊からたった1年とか1年半の間にですよ。ですから、新編集長になった私へのおみやげは、一切なし（笑）。それでも定期刊行は至上命令ですから出すには出しましたけれども、惨憺たる成績でした。そのとき営業部の者は、「学芸文庫」担当になってから一年以上増刷の出し方を知らなかったと言っています。そんな中で、一生懸命やっていた。でも、あるとき先輩が私のことを呼んで、「きみね、こんなこと続けていたらだめだよ。プレーンの先生を紹介するから、その人のところへ行ってみて、ちゃんとした本を教えてもらいなさい」と言われたことがあったんですよ。それから、先にお話した『書店風雲録』にも載っている有名書店人から、「学芸文庫は何やってるんだ！」と一喝されたこともありました。でも、じつをいうと、そのとき私はすでに「20世紀クラシックス」を仕込んでいて、勝算はともかく、徐々に刊行の目途が立ち始めていました。

20世紀クラシックス——企画の「星座」

文庫というのは、二次使用のメディアだと申し上げました。文芸書で売れ行き良好のものは、各社こぞって文庫化されていましたけれども、人文書のいいものは、絶版になったまま、出版史の流れの底にたくさん沈んでいたんですね。ですから他社で売れているものを掠め取るようなことは、とりあえず必要ありませんでした。「浚渫（しゅんせつ）[どぶさらい]」の作業こそが必要でした。でも、それだけでは足りなくなるのは目に見えていましたので、新訳を積極的に依頼したりしました。今、光文社文庫で、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』などがベストセラーになっています。“文庫新訳”と銘打って話題になりましたが、じつは「学芸文庫」はかなり早い時期に文庫新訳を手掛けていました。ですから、流れの底に沈んでいる他社版の優れた著作と、これから世に出すための新訳を、企画の両

輪として据えることにしたのです。

はじめに、「どぶさらい」の話をいたします。ハンナ・アレントという女性の哲学者・政治思想家がいます。その著作に『人間の条件』（原著：1958年）というものがあって、「学芸文庫」から1994年10月に刊行されました。現在、18刷、52,500部まで来ています。これが、このシリーズの中で一番たくさん読者を獲得した本です。

『人間の条件』という本は、中央公論社が1973年に刊行して以来、ずっと絶版のままになっていたものです。アレントはユダヤ人の家に生まれた哲学の徒で、マールブルク大学でハイデッガーに教えを受けている（1924年）。それだけでなく、18歳の才色兼備の娘が17歳も年の離れた師に恋愛感情を抱いたりしていたんですが、ハイデッガーという人はご承知のとおり親ナチに傾斜していきます。結局、ユダヤ人であるアレントは1941年にアメリカに亡命するけれども、戦後に『全体主義の起源』（翻訳：みすず書房）という本を書いている。何でユダヤ人虐殺という悲惨なことが起こってしまったんだろう、「起こってはならないことが起こってしまった」というモチーフを展開して、そういう初期著作だけが継続的に読まれていました。じつは政治哲学の原理を綴った著作というのは、ほかならぬ、この『人間の条件』だったんです。でも、中央公論社は増刷する気配もなく、文庫化の依頼状を出したらすぐOKをくれたんですね。

おもしろいのは、アレントという政治哲学者はマルクス主義の陣営からはあまり評価されていなかった人なんです。中央公論社は非左翼的な文脈の出版活動を中心にしてきた会社なので、おそらく、アレントもそうした位置づけから刊行されたのではないかと推測されます。訳者もそういう人だったんですね。ところがと、1989年にベルリンの壁が崩壊して、91年にソ連が分裂して、冷戦構造が一挙に解けてしまった。そうした中で、アレントという政治学者がもっている、単純な「右左」の二分法を超えた根源的な思索が再評価され始めてきました。ちょうど学芸文庫版と同じ1994年に、みすず書房から『過去と未来の間』が、岩波書店から『精神の生活』が翻訳出版されました。そのようなことから、書評などに「アレント復権」ということがかなり取り上げられた。でも、たぶん一番大きかったのは、同時期にその思想が文庫化されたことだと、自分の先見の明を自分でほめてやりたい（笑い）、そのように思っています。

次に、文庫新訳のお話をします。『人間の条件』の翌年、1995年刊行のヴァルター・ベンヤミンの作品を編んだ『ベンヤミン・コレクション』です。営業部時代に読書会に誘われて、晶文社版で『ベンヤミン著作集』を読んだ、ということは先にお話しました。難解な文体を駆使する批評家で、60年代、70年代の翻訳には当然時代的な制約がありました。じつは、1994年に岩波文庫から、ベンヤミンの『ボードレール 他五篇』『暴力批判論 他十篇』が刊行されました。それは、『ベンヤミン著作集』をもとに再編集したものでした。頭をたたかれたような衝撃がありました。「ベンヤミンが文庫になる！」しかし、文庫版で出すならば、新たに訳し直さなければいけないと思いました。そこで、急遽東大の浅井健二郎先生に相談して、700ページにならんとする文庫新訳『ベンヤミン・コレクション1』をたった1年で完成させました。今ベンヤミンを読むならば「学芸文庫」版が定本となる、というのはもはや周知のことになっているようです。もちろん、部数も8刷、2万4500部ととてもよく読まれています。

ちょっと前ですと、アレントとかベンヤミンが万単位で読まれるということは絶対に考えられなかったことです。あり得ない。あり得ないことがなぜ起こるのかというと、やはり、企画の中で《文脈づけ》ができたからだろうと思うんです。文脈というのはどういうことか。たとえば、本というのはすべてが個別の作品なので、1冊1冊を見るならば他の本との関係などというものは基本的に成り立ち得ません。しかし、「ある考え」のもとにまとめて出していくと、そこで何かが行われているのかもしれない、と読者は気がつくはずなんです。20世紀の古典の本が、このように1年に7冊とか8冊とか出ますね。つまり、3カ月に2冊ぐらいいは、この傾向の本が店頭と並ぶわけなんです。そうすると、いやでも目につきますね。ですから、1冊1冊いい本を出すのではなくて、企画全体の中で文脈をつけていくことが、出版社がやろうとしていることを非常に雄弁に物語るのではないかと私は思っています。

それを「企画の『星座』」と名づけています。これは私が考えたことではなく、ヴァルター・ベンヤミンの術語ですが。ドイツ語でいうとKonstellation、英語でconstellation、翻訳すると「星座」になります。比喩的に使われるので、「状況布置」という意識もあるけれども、どうでしょう。本はたくさん出ますね。ただ見ているだけならば、ばらばらです。だけど、核になるようないくつかの点が見えてくると、たとえば、図柄のようなものが描けるかもしれません。古代ギリシアの人たちは、今よりもっときれいな空の星に、「白鳥」の図柄を見たり、「天秤」の図柄を見たりした。それは、ばらばらな星をイメージの中でつなげているからですね。我々がやっている仕事もじつはたくさん星をばら撒いて

いるのだけれども、何となく図柄が描けるかもしれない。そういうものとして本を世の中に送り出したい、ということをも意識していました。

20 世紀クラシックス——最初の思考

アレントとベンヤミンの話をしました。もう1つ紹介します。あまり一般受けしないかもしれませんが、ゲオルク・ジンメルというドイツの哲学者がいます。ジンメルが文庫になるということは、アレントやベンヤミン以上にあり得なかったですね。1999年に刊行した『ジンメル・コレクション』は、それでも6刷で1万部以上読まれています。哲学者だけれども、社会学的な思考に初めて取り組んだ人で、魅力的な哲学エッセーを多く残しています。その断片的で非体系的な仕事は、白水社の『ジンメル著作集』でしか読めませんでした。

何がすごいといって、たとえば「流行」についてこう論じているんですね。「流行においては、一様性衝動つまり模倣への衝動と、個性化衝動つまり突出への衝動とがきわだった形で同時に現れている」（『女性と流行』）と言うんですね。要するに、他人に似ながら自分だけが目立つという、矛盾した2つのことを同時に実現しようとする現象が「流行」なんだと見抜いています。今となっては、当たり前かもしれないけれども、これを書いたのが1908年ですからね。要するに、大衆社会の現象である「流行」が世の中に全く出現していない時代、貴族階級や上流階級の中でかろうじて見られていたにすぎない時代に、そうしたことを言っているんです。今「流行論」をやるという人はたくさんいますけれども、これを20世紀で初めて思索の対象にしたというのはものすごく意味があって、100年前によくぞこんなことを考えたとびっくりします。

ジンメルと一緒に参照してほしいのが、ソースティン・ヴェブレンというアメリカの経済学者の『有閑階級の理論』という本です。これは「消費」ということを初めて考えた著作です。これも、消費社会なんてものが影も形もなかった1899年の刊行です。そこで、「顕示的消費」ということが言われている。「顕示的」とは、これ見よがしに見せつける、という意味です。要するに、上流階級の人たちが「私ってこんなにすごいよ」、「こんなに豊かなのよ」と誇示するために消費活動をするというのです。逆に言えば、消費活動のもとにある根本的な心性が「顕示」だというわけですから、機が熟せば、その後一般階級のほうにもどんどん拡散していくことは明らかでしょう。これが20世紀の幕開け直前に出ているんですね。

「流行」や「消費」というものを考えようとすると、この2冊は欠かせません。「記号の消費」（ボードリヤール）というタームで消費社会が論じられることがよくありますが、この2冊が嚆矢であることは意外と知られていないんですよ。やっぱり、そういうことをちゃんとみんなが読めるような形で残していくことが、すごく大事だと思っていました。

先ほどマルクスのお話をしましたが、マルクスは19世紀に生きた人ですから、当然、20世紀の社会のすべてを予見できたわけではありませんでした。20世紀を考えるにあたって、マルクスを補助線として使わせてもらおうと、いろいろなことが見えてきます。

工業化以前は人口のほとんどが農民層だったでしょうが、資本主義の発達とともに労働者階級が爆発的に増えてきて工場労働などに勤しんでいた。マルクスは、そこに問題の根源を見た。だからサラリーマン、ホワイトカラーばかりで形作られる20世紀の都市社会を想像すべくもなかった。それは、当然のことです。それならば、そういう層のことを最初に考え、論じた人は誰なんだろう、という問いが立つわけですね。「学芸文庫」には別の著作が入っていますが、ジークフリート・クラカウアーという社会学者がいて、その『サラリーマン』（翻訳：法政大学出版局）で、おそらく初めてワイマール期（1920年代）ドイツのホワイトカラー層が論じられたのだと思います。

マルクスが予見できなかった2つ目は、消費社会の到来です。これについては、先にお話しました。生活に必要なものだけを買うのではなくて、余分なものまで「記号の消費」をするように仕向けられる社会。これが現代の社会です。預金などではやめて、どんどん消費してくれないと景気がよくなる、というのが内需拡大を謳う経済学者の言い分ですね。

3つ目は、官僚型の社会。官僚型社会というのは、一般に役人によって管理される社会をいうのですが、企業にいる人間もほとんど官僚型社会の構成員だといって差し支えないと思います。19世紀には労働者と資本家という2つの階級があって、資本家は圧倒的に強い個性で、自分の会社を動かしていくわけです。ところが、今の大企業の経

営者はほとんどがいわば「雇われ社長」です。そうすると、そういう会社が資本家と労働者という関係で動いているかということ、全くそんなことはなくて、ほとんどが官僚型の決定プロセスを経て運営されている。私は、はたして出版社の経営をしている「資本家」なのでしょうか。違うでしょうね。筑摩書房というひとつの官僚型企業を運営しているにすぎません。たとえば、そういう今の社会はいったいどういう社会なのか、ということをもう一度考えるための最も基本的なテキストを提供すべきではないか、そう思っております。

初めてなされる思索の中には、夢の要素と現実の要素が部妙な割合で調合されていることが多いですね。今の社会では失われてしまった可能性が古い著作の中で息づいていることは、よくあることなのです。

窮余の「裏ワザ」

あとは、今まで話したことと少し違いますが、企画を立てる上での「裏ワザ」のようなものをご紹介します。それは、翻訳における著作権法上の「10年留保」を有効活用せよ、ということです。

著作権は、ご承知のように、執筆者の死後50年間継続します。だから、翻訳出版するためには、もちろん翻訳権を取得する必要があります。つまり、原著作権者と契約して、しかるべきお金を払わなくてははいけない。そうしないと、「海賊版」になってしまう。ですから、翻訳書を出すとなると、原著者への支払いと翻訳者への支払いという、二重の経費を覚悟しなければなりません。国内の著作ならば、だいたい10%前後が著者の印税に当てられますが、翻訳書を出すとなると、原著者に6~7%、訳者にも6~7%、合計で12~14%ぐらいを払わなくてははいけない。とても負担なんですね。

ところが、日本には有効に使える法律条項がありまして、それを「10年留保」といいます。1970年に日本の著作権法が改正されているけれども、それを境として1970年以前に刊行された本で、10年間翻訳が出なかった本は翻訳権がいらなくなるという法律なんです。一方、1971年以降に刊行された本は、著者の死後50年たない限りずっと翻訳権が存続します。

本屋さんへ行ってみると、翻訳書でいくつも種類の訳があるものがありますね。いわゆる大古典は別にして、たとえばハイデッガーの『存在と時間』という20世紀を代表する著作は、4つぐらいのバージョンがあるのではないですか。「岩波文庫」で桑木務訳、「学芸文庫」で細谷貞雄訳があり、「中公クラシックス」から原佑・渡邊二郎訳がある。創文社の辻村公一訳は『有と時』というタイトルですが、同じものです。ハイデッガーは、1889年生まれで1976年まで生きていましたから、50年後の2026年まで著作権が残っています。ところが、『存在と時間』は1927年に出ていて、しかもきわめて難解な本なので、翻訳が完成したのは戦後もずっと後のことです。ですから、「10年留保」の法律を使えば、翻訳権がいらなくなり、いくつものバージョンを出せるというわけです。その代わり、逆にいうと、1つの出版社が翻訳権をとってしまった本というのは、どんなにひどい訳でも他社は手を出せない。ひどい訳を作ってしまうと、その出版社の責任が重いんですね。

「学芸文庫」の場合、資金的なゆとりがなかったものですから、なるべく著者の死後50年を経過して翻訳権の消滅した本と、それから「10年留保」に該当する本を意識的に選びました。たとえばメルロ＝ポンティ（1908 - 61年）という人がいます。フランス系の思想家で人気があり、ほとんど翻訳権がとられてしまっています。みず書房からたくさんの翻訳が刊行されているんですが、文庫化しようと思っても手が出せないんです。でも何とか出したいならば、どうしたらいいか。刊行されてから10年間訳されていない論文ばかりを集めてきて、1冊に編むんですね。あまり本質的な論考ばかりがラインナップされるとは限らないけれども、「学芸文庫」の『メルロ＝ポンティ・コレクション』ならば思想のアウトラインだけはつかめる、そんな趣旨の企画でした。

本当に仕事ができたと感じるのは、「学芸文庫」の6年ほど、1990年代終わりくらいまでです。一瞬、「学芸文庫」のことを気にしてくれている読者の顔が見えてきた時期がありまして、この本を出せば2万人ぐらいの人が自分の仕事を見ていてくれるな、と。勘ですけれども。2万人見ていてくれて、5000人とか6000人の人が自分の趣味・関心にあった本を買ってくださる。それは編集者にとって至福の時間でした。そういうことがずっと続くだろう、と思っていたんですが、パタリと読者の顔が見えなくなりました。というのは、企画自体が弱くなっていくからなんです。それは、仕方がないことですね。そういう中で、若い編集者が私の仕事について、自分のオリジナルの仕事を築いていく時期が到来したということです。

じつは、「学芸文庫」の売り上げ不振が云々されていたところに、こんなに売れなくてしょうがないからレポートを出せと言われたことがありました。今日お話ししようと思っいろいろ古い資料をさらっていたら、そのレポートが出てきて、なかなかいいことを書いているんですね。1996年1月の日付がありました(ということは、「20世紀クラシックス」はすでに緒についていて、シリーズ全体にも曙光が差し始めた頃です。企画の進行と会社の評価とは、こうしていつでもタイム・ラグがあるものです)。ちょっと読みますね。

——新しい著作を世に送り出す一般書の新刊活動とは異なり、すでに「ある」ものを再集成するという文庫の事業が「後ろ向き」かといえば、必ずしもそんなことはない。〈表層〉に浮かび出ているものばかりではなく、〈下層〉に沈殿しているものを、新たな文脈の中に置き直す作業(《引用》)、これが文庫版シリーズが担う精神であろう。なにしろ、日本はどんどん生産してどんどん捨てていく国、沈殿物にはことかかない。いわゆる「浚渫」作業のなかから、新しい文脈をつくりたい。この精神は、この間のラインナップのなかに生かされていると信ずるし、またその表現こそが編集長の個性となろう。《引用》されたものがなんらかの図柄をつくり上げる、たとえば星々がギリシアの人々にとって「星座」に見えたように。この「星座」はあくまでも受容者にとってのもの、送り手の「意図」をこえて豊かにもなったりするし、また逆もあるだろう。——

最後にまとめ

先ほど「星座」の話をしましたけれども、じつは我々が皆さんに送り届けようと意図したものと、皆さんが受け取られたものとの図柄が全く違っていても構わないと思うんです。皆さん方がそれぞれ同じような本を何冊か選んでいただいても、これが別のイメージを形成することもある。ですから、ご自身の本棚を眺めていただいて、ご自身も持っている「星座」の形みたいなものを確かめていただくということが、ものすごく大事なことではないかと思っています。

もう1つは、個性が乏しくなっている時代ですが、各出版社の編集者ですごく頑張っている人がたくさんいるので、ぜひとも「あとがき」を開けていただいて、編集者の名前が何度か目につきましたら、その編集者のファンになってやってください。そして、その編集者の本を買ってやるということをしていただくと、非常にいいのではないかと思います。

ご清聴、ありがとうございました。

質疑応答

司会 ありがとうございます。お時間がまだございますので、熊沢さんにご質問等お願いいたします。

会場1 「10年留保」についてもう一度ご説明お願いいたします。原著が出て10年間翻訳されなかったら、何とおっしゃったんですか。

熊沢 (黒板に書きながら説明) 著作権というのは死後50年間残ります。ところが、1970年という節目の年がありまして、原著がこれ以前に出たとしますね。それが10年間翻訳されなければ、著者の死後50年を経過していなくても翻訳権が消滅するという事です。

会場1 それが青空文庫になっている？

熊沢 そう。でも、青空文庫は、死後50年経過して、ほんとうに著作権が消滅した人が多いんじゃないですか。「10年留保」で青空文庫になっているものがあるかどうかはわかりません。翻訳者の著作権は生きていますから。

会場1 勝手に翻訳してもいい？

熊沢 「10年留保」のものは翻訳フリーです。

会場1 そうすると、10年経つのを待ってから翻訳したら6%払わなくてもいい。それが裏ワザということですね。

熊沢 そうですね。

会場1 待ったほうがいい。そういうことをおっしゃりたかったわけですね。

熊沢 まあ、そういうことですがけれども、でも、10年以内に翻訳が出てしまっていたら、だめなんですよ。だから、10年間翻訳が出なかったものを探すんです。お分かりですか。

司会 その場合、著作権はあるんですね。翻訳権だけが…。

熊沢 日本における著作権がないんです。著作権と翻訳権は同じものですから。

司会 外国で出版された本は？

熊沢 ええ。だから、よく外国から怒ってきますよ。何でうちの本を無許可で出しているんだと。それは日本の「10年留保」を明記した国内法を知らないからです。世界で通用している著作権保護期間は、あくまで死後50年なんです。これだけしかないんです、ヨーロッパもアメリカも。日本でも、1970年に国内法が世界レベルにあわせて改正されています。しかし、これ以前のものには遡及しないわけです。

司会 では、外国から訴えられることもないんですね。

熊沢 大丈夫です。日本の裁判所に訴えなければいけないので、日本の法律にのっとれば遵法と認められるわけですから。

会場1 それはそれで、アレントとベンヤミンとジンメルは、10年の裏ワザを使われたんですか。

熊沢 1918年没のジンメルの著作権は、とうに切れています。ベンヤミンは1940年に死んでいるので、翻訳刊行の時点でギリギリ切れていました。アレントは2025年まで著作権があります。ただし、『人間の条件』は「10年留保」です。もう1冊文庫化した『革命について』は「10年留保」が成立せず、翻訳権をとりました。

会場1 一覧表の中で10年の裏ワザを使ったものはどれなんですか（笑い）。

熊沢 「10年留保」の裏ワザばかりが活字化されても困りますが、アレントの『人間の条件』はさきほど申し上げたように「10年留保」ですね。原著が1953年に出ていて、翻訳は1973年刊です。つまり、原著刊行は1970年以前で、翻訳が出るまでに20年かかっているの、条件をクリアしています。じつは、文庫化にあたって、原出版社に翻訳権をとっているのかどうか聞いてみました。そうしたら、古いことなので判然としないが、どうやら翻訳権をとっていた「気配」がある、というんですね。要するに10年留保になる1963年以前に翻訳権取得を申請したはずなんです。ところが翻訳が長引いて、結局10年以上たってしまったのではないかと思います。わかりますか？ うちも同じように翻訳権を流したことがよくあります。だから、翻訳権をとっていたのだけれども、なかなか訳が上がらないで、そのうち原著刊行から10年が過ぎてしまうんですよ。そうこうするうちに他の出版社から別の翻訳が出てしまったりするんです。

会場1 いずれにしても、アレントの『人間の条件』は「10年留保」？

熊沢 「10年留保」ですね。

会場1 ありがとうございます。

会場2 1970年というのは法令の名前があるんですか。

熊沢 著作権法の改正です。

会場2 著作権法の改正の中でやっているわけですか。

熊沢 そうです。

会場2 分かりました。ありがとうございます。

司会 著作権講義といった感じになってきましたが、この「10年留保」の話というのは、「学芸文庫」を出版されるにあたって、かかってしまうコストの部分をいかに抑えて、濃い内容のものを皆さまのお手元に届けていくかというところで、苦労をなさったというお話ですね。著作権以外でほかにご質問ございますか。

会場2 「ちくま文庫」といいますと、私は安野光雅さんの、あの表紙絵で、どちらかという、内容よりもそちらのほうを愛でてしまっているんですけども、安野さんとの関わりについて一言お願いします。

熊沢 1985年に「ちくま文庫」を立ち上げるときに、総合デザインを安野先生にお願いしました。表紙の第1面は個々のデザイナーの手になるものです。安野さんが造ってくださったのは、表表紙のパターン、裏表紙、背です。古く立ち上げた文庫には、「あ-1-1」とかいう分類番号がありませんでした。現在ついているのは、後から入れたものですね。だから、新潮文庫にしる角川文庫にしる、分類番号が見にくい場所に入っています。私たちは後発だったので、分類番号を最初から考慮してデザインをしました。本が棚に並んだときに、横一直線に分類番号が揃ってきれいに見えるようにです。このデザインを安野先生にお願いしたんです。

会場2 分かりました。

会場3 先ほど、下に沈んだものをピックアップしていくというお話だったんですが、その感覚というか、どういう感じで拾い出していくんですか。言葉にするのは難しいかもしれませんが。

熊沢 難しいですね。

会場3 時代に合わせていくのか、それとも…、何千冊もある本の中からどうやってピックアップするのかなど。

熊沢 たとえば「20世紀は、もはや古典なんだ」ということを気がつけば、古典になるような本というのはいくつもありませんから、それに気がつくかどうかですね。逆にいえば、うちは19世紀、18世紀の本を出せていないんです。「岩波文庫」が充実していますからね。だから太刀打ちできない。でも、「岩波文庫」は20世紀思想にあまり力を入れていなかったんです。だから、「学芸文庫」がやれるのはそこだけだ、ということに気がついたんですね。気がつくと、著者と作品をリストアップできるでしょ。すぐれた著作というのはいくつもありませんから。ずいぶん底に沈んでいましたよ。それこそ、いっぱい。

会場4 20世紀初頭の人が出て、これは読みたい本ですが、20世紀後半は、まだ古典とはいえないでしょうけれども、こういったものが読みたいとすると…。

熊沢 今日のリストには載せていませんけれども、「学芸文庫」に結構入っています。1930年代以降の生まれの思想家は、「20世紀クラシックス」の分類から便宜的に除外してあります。たとえばフーコーとか、デリダだとか、ポストモダンの人たち。1970年以降に刊行されたそれらの著作には、すべて翻訳権があります。裏ワザは使い方がないんですよ。ということは、権利は翻訳権を最初にとったところのものなんですね。だから、それを「塊」として充実させるというのは、なかなか大変ですね。でも、「学芸文庫」を見ていただくと、確かにいくつかはあります。シリーズが軌道に乗り、資金にいくぶん余裕が出て、いくつかは翻訳権を取得できましたので。

司会 では、お時間も近づきましたので、質問をこのへんで終わりにさせていただきます。本日の熊沢さんのお話から見てきた「本選びのポイント」は大きくは4つあるのかなと感じられました。1つは、「ちくま学芸文庫」の特色にみるポイントが2つ。1つ目が、海外の古典的作品を通して20世紀を考えるとときには、「ちくま学芸文庫」の「20世紀クラシックス」がおすすめらしいということですね。もう1つが、「20世紀クラシックス」は新訳が多く、絶版になった本を生き返らせることもあるし、場合によってはハードカバーの再録ではない作品も多い。文庫としてはちょっと高いけれども、先ほどの裏ワザを使われているので、中身に対してお得だというようなお話がみられました。それから、「学芸文庫」のお話というよりはもう少し広い目線になりますが、熊沢さん伝授のポイントとして2つ。1つは、自分好みの感性の合う編集者をチェックしようというお話でした。たとえば、きょうのお話を聞いて、熊沢さんと感性が合うなと思った方は、レジメの中で熊沢さん企画の◎の本をチェックしてみるといいのではないかなということが、「学芸文庫」でも他の編集者の本でも当てはまるのではないかなと思います。

熊沢 いっぱい載っていますから、より取り見取りです。

司会 編集者をチェックするということですね。それからあとは、先ほど「星座」を描いてくださいましたが、出版社の発行物やシリーズは1冊1冊の本が集まって「星座」を描いているので、また、一方でご自身の本棚も星座を描いているのではないかなというお話がありました。その星座が自分の星座と出版社の星座の重なるところに、あなたに選ばれるのを待っている1冊があるのではないかなというお話だったのかなと思います。

今のお話を延長すると、ご自分の知りたいことを自分自身で再確認する。自分の星座をどっちに伸ばしていきたいかというのを自分自身でもう一度考えてみるのが、知りたい本をえるため、知りたい情報を得るための大切なポイントになっていくというお話につながるのかなというふうに聞き、感じました。

さらに、千代田図書館から出版社の特色を知るためのポイントをもう1つ。配布資料の中に「ちくま」という冊子が入っております。これは筑摩書房が発行している「PR誌」です。出版社が発行する本の広告や目録、書評などに加えて、特集や有名作家の小説、エッセイなど、読みものとしてもとても充実しています。最新の出版物の詳しい情報や出版社の特色や得意な分野などが、これら出版社PR誌には本を選ぶときのヒントが満載ですので、PR誌もぜひチェックしてください。

千代田図書館には「出版社PR誌」を約20タイトル集めたコーナーがありますので、いろいろな出版社のPR誌でその特色をチェックして、これまた本選びの参考にしていただけたらと思います。

今回は、平凡社の関口さんが「百科事典ができるまで」と題してお話しくくださいます。こちらは7月6日からの申し込み受付始まりですので、こちらへもご参加お待ちしております。

それでは、これで本日のセミナーを終了いたします。このビルは千代田区の方針で設定温度が28℃になっているんですが、皆さまの熱気でさらに暑くなっているところを最後までお話しくくださりましてありがとうございました。

では、改めまして、とてもおもしろいお話を聞かせてくださいました、熊沢さんにもう一度拍手をお願いいたします。
(拍手)

本日は、どうもありがとうございました。

